

授業研究部【体育】

I 研究主題

「たのしい できそう いっしょにもっと！ 運動好きな十津っ子」

II 研究主題設定の理由

1. 今日の課題から

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが社会で活躍するところには、生産年齢人口の減少やグローバル化の進展、ICT やビッグデータ、人工知能（AI）等をはじめとする絶え間ない技術革新により、社会構造が急速に変化していく時代となっていることが予想される。その激しい社会変化の中において学校教育では、子どもたちが、様々な社会変化に向き合い、自ら判断し、主体的に関わり、他者と協働し課題を解決しながら、よりよい社会とよりよい人生を創り出せる力を育成していくことが求められている。

こうした時代を迎える中で、一人ひとりが豊かな人生を送り、安心して暮らせる社会を実現するため、教育が果たす役割は重大であり、教育の在り方も進化を遂げなければならない。社会が抱える諸問題に向き合い、子どもたちの誰もが夢を持ち、その夢を紡いでいく上で、子どもたちに健やかな心身の育成を図ることは、極めて重要である。体力は、人間の活動の源であり、健康維持のほか意欲や気力といった精神面の充実に大きくかかわっており、生きる力を支える重要な要素であると言える。

2. 学習指導要領から

平成 29 年 3 月末に新たな学習指導要領が告示された。知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等が、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱で再整理された。総則（以下、総則という）第 1 の 3 には以下のように示されている。

豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される児童に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動（以下「各教科等」という。ただし、第 2 の 3 の（2）のア及びウにおいて、特別活動については学級活動〔学校給食に係るものを除く。〕に限る。）の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら、教育活動の充実を図るものとする。その際、児童の発達の段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

これまでどおり、日本の教育において「生きる力」の育成を目指し、身に付けることを目指す資質や能力を教科、領域を超えて示している。現行学習指導要領における体育科の指導内容は各領域に示された「技能」「態度」「思考・判断」であることを考えると、新学習指導要領で示された 3 つの資質や能力に近い構造であることがわかる。もちろん、同一ではないが、体育科は技能に偏らず、全人的な教育を推進してきた教科であることを念頭においておきたい。新たに示された体育科の目標は以下のとおりである。

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
- (2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。
- (3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。

体育科では現行学習指導要領でも、「第 3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中で「児童自らが運動の課題の解決を目指す活動を行えるよう工夫すること。」と示されている。しかしこれは決して教師が指導しないのではなく、全教科を通じて強調されている子ども主体の学習が深まるよう教師の支援が一層重要になることに留意すべきである。

3. 児童の実態から

本校は海を見下ろす山の中腹にあり、春にはウグイスがなき時折タヌキが校内を散歩する、自然に恵まれた学校である。子どもたちは明るく素直で、休み時間には広い運動場で元気に遊ぶ姿が見られる。いろいろなことに積極的に取り組み、友達と協力して仲良く活動することができる。地域の方にも温かく見守られ、のびのびとした学校生活を送っている。しかしその中には、厳しい家庭環境の中、学習習慣が身につけていないため学力に遅れが目立つ子や、朝起きられず遅刻を繰り返す子、自己肯定感が低く自分の良さを感じることをできない子もいる。また、体を動かすことに消極的な児童や肥満傾向にある児童もあり、2極化が見られる。

体力テストの結果は全国平均と比較して、学年レベルは男子が2項目（反復横跳び・立ち幅跳び）、女子が3項目（上体起こし・反復横跳び・立ち幅跳び）において下回っている。体格集計を見てみると、男子は身長で県・全国より若干低く、体重はほぼ平均同等、女子は身長体重共に県・全国平均を上回っている。児童質問紙調査で気になるのは運動への愛好的態度や運動への自信について男子に比べると女子の肯定群が少ない結果が出ており、運動の楽しさやできたといった実感を味わわせる手立てが必要であると考えられる。

友達と助け合う、役割を果たす、話し合いや協力による課題解決などについては肯定的に答えた割合は県・全国の実態を上回る結果が出ており、児童相互のかかわりを意図した活動のある授業が展開されている。しかし、体育授業について楽しいかの問いについては県・全国を下回っている。

運動する楽しさや学ぶことの楽しさを大切にしながら動きづくりや思考力・判断力が身に付く授業が積み重なって、そこから日常生活の中にどれだけ運動する環境を位置づけることができるかが運動好きな子ども、ひいては体力向上につながる課題といえる。体育科の特性を生かし、豊かな人間性を育み、円滑な人間関係を築いていく体育学習を求めていきたい。

4. 学校教育目標の具現化から

「人とのかかわりを深め共にのびる子どもを育てる」という本校の研究統一主題を具現化するために、その子ども像を「自ら学ぶ子」「たくましい子」「心豊かな子」とおさえ、4部（授業研究部【体育・国語】・人権教育部・特別活動部・生徒指導部）で取り組んでいる。授業研究部【体育】では、「たのしい できそう もっともっと！ 運動好きな十津っ子」（子ども像を一言でいうと・・・）という具体的なイメージを想定し、めざす子ども像の実証に向けて研究主題として取り組むこととした。

5. 研究主題にせまる子どもの姿

「たのしい できそう いっしょにもっと！ 運動好きな十津っ子」とは、活動する子どもの姿をイメージしながら掲げたものである。

運動そのものの魅力的な価値に触れ楽しさを味わっている、できそうだという自己有能感・自己肯定感を感じている、いっしょにもっと活動したいという発展的・親和的な活動欲求に支えられながらやさしく素直な心で他者や自己を認め、学習に向かう子どもの姿を現している。このようにさまざまな運動を仲間と楽しく行うことで、楽しいな、気持ちいいな、うれしいなという運動への愛好的態度や意欲を育て、自分の見つけた課題解決のために考えて運動したり、工夫したり、自ら考えながら行える力を育てることが変化の激しい未来を生き抜く基礎・基本となるという思いから研究主題として設定した。

このような人とのかかわりを通して共に伸びる学習のあり方について、全教育活動を通して研究を進めていく。その中でも、かかわりを意図した活動を組みやすい体育科の研究、および研究を発展させるために国語科を中核に据えて主題に迫っていく。

人とのかかわりを通して期待するもの

- ・ 知識、技能（健康・体力）
- ・ 学び方・コミュニケーション能力（思考力、判断力、自己決定力、表現力）
- ・ 自己・他者肯定感（豊かな心）

基礎・基本

主題達成に向けての具体的な授業，活動イメージ

- 心の共有体験を促す活動の導入
(数値化，ゲーム化，集団化，協同，競争，エンカウターの導入など)
- 個の高まりをめざしたペア，グループ学習の継続
(いつでも どこでも だれとでも)
- 易しい学習，優しい学習の継続
(基礎感覚づくりと基本的な動きづくり，みんなが活躍できる活動)
- 相互評価活動の視点の明確化
(わかるとできるをつなぐ目標と課題提示，なにをどのように評価させるのか)
- 自己有能感を高める評価活動の工夫
(がんばった自分，がんばれる自分への気づき) など

Ⅲ 研究仮説

- 心と体のスイッチオンを図る体ほぐしの趣旨を生かした運動を取り入れることで肯定的雰囲気や関係性は深まり，子ども自らが，いつでもどこでもだれとでもかかわりを求めながら学んでいくのではないか？
- 固定しないペアやグループでの学習を繰り返すことで，個々の学びは広がりを見せ，支え合い，助け合う集団を形作っていくのではないか？
- やさしい場ややさしい動きを導入することで意欲的な個の学びを引き出し，基礎的・基本的な力を身につけていくのではないか？
- かかわり合いの視点を価値づけ，設定していくことで相互の学びは深まりを見せ，思考力や表現力は高まっていくのではないか？
- 自己の伸びに気づくことができる活動を導入することで，達成感や自己有能感・自己肯定感は高まっていくのではないか？



基本的な考え方

IV 研究構造図

基本的な考え方

- 個の変容は集団を介した学習によって実現する。
- 個の変容は多様な価値観との出会いの中で実現する。

頭のわかる

いっしょに

心

体

たのしむ

できる

他者

運動

自己

活動のエネルギー

自己

いっしょに

活動のエネルギー

自己

たのしい

活動のエネルギー

課題意識

○心の共有体験を促す活動の導入
(数値化、ゲーム化、集団化、協同、競争、エンカウターの導入など)
○個の高まりをめざしたペア、グループ学習の継続
(いつでも どこでも だれとでも)
○易しい学習、優しい学習の継続
(基礎感覚づくりと基本的な動きづくり、みんなが活躍できる活動)

○相互評価活動の視点の明確化
(わかるとできるをつなぐ目標と課題提示、なにをどのように評価させるのか)
○自己有能感を高める評価活動の工夫
(がんばった自分、がんばれる自分への気づき)

○他者とのかわり合いを重視した体育

○子どもの思考を重視した体育